水害のない安全。安心なまちづくり

市内の8割が約1カ月間水没

豊栄市は、ほぼ市内全域が海抜0メール地帯で豊栄の歴史は「干拓」と「水との闘い」の歴史と言っていいでしょう。

多くの市民の記憶に残っている、昭和41年・42年の羽越水害では、市内全域が水没し、特に昭和41年では、市内の8割が約1カ月間も水に浸かっていました。その後も毎年のように洪水は発生し、治水は市民全体の願いでした。

関　清義さん（69歳　上堀田）

プロフィール

豊栄土地改良区理事長、西部郷土地改良協議会会長、阿賀用水右岸土地改良区連合理事長、新潟県土地改良事業連合理事

東洋一と言われた新井郷川排水機場の全面更新へ

昭和29年に完成した、当時東洋一と言われた「新井郷川排水機場」。その排水機場も老朽化が進み全面更新が迫られていました。

私が、平成2年に理事長になったころから計画が本格的となりました。当時はバブル景気の末期、小川市長とともにさまざまな所へ陳情に行きました。幸いにも今と違って時代も良く、平成7年に新井郷川排水機場の隣に新排水機場が完成しました。

毎秒20トンポンプが5台、この5台が運転すると学校の25mプールの水を4から5秒で排水する能力があります。

市民の悲願であった福島潟放水路が完成

昭和43年に計画されてから遅々として進まなかった放水路建設。昭和62年からようやく建設工事が始まりました。

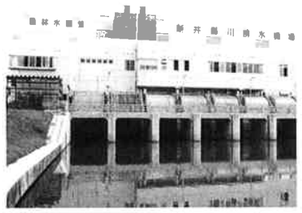
その工事が、平成10年8月の洪水をきっかけに工事期間が3年間短縮され、平成15年3月に完成し、通水しました。

2つのゴム堰（せき）で水を調整しながら、洪水時には最大毎秒300トン（新井郷川排水機場の約3倍）を自然排水します。

昨年の7・13水害で始めて2つのゴム堰が開けられその威力を発揮しました。今後しばらくは、洪水の心配をしなくても良いと思っています。

また、平成15年度から新たに「新井郷川圏域河川整備計画」がスタート。福島潟の遊水地の拡大や新井郷川入口に水門を設置、福島潟を囲む堤防の嵩上（かさあ）げなどが進められています。これらが完成すると30年に1回程度に発生する規模の降雨に対しても河川の氾濫（はんらん）を防ぐことが出来ます。

昨年7月13日にか働した潮止堰



平成7年に新しくなった排水機場

昭和41年の洪水で水没した葛塚市街地（豊栄駅上空）

『豊栄人の誇り』

先人は水と権力と闘った

新・新潟市に合併するにあたり、ふるさと豊栄の良き伝統や歴史、良き人柄や気質をしっかりと残し、引き継いでいきたいと思います。

我が市の歴史を振り返ってみますと、享保15（1730）年、阿賀野川が松ヶ崎（現在の新潟市松浜）で海に切り落とされてからが本格的な干拓の始まりです。それは人と自然（水）との闘いであり、土地をめぐっての時の権力と人との壮絶な闘いの歴史でありました。

小川　竹二　豊栄市長

プロフィール

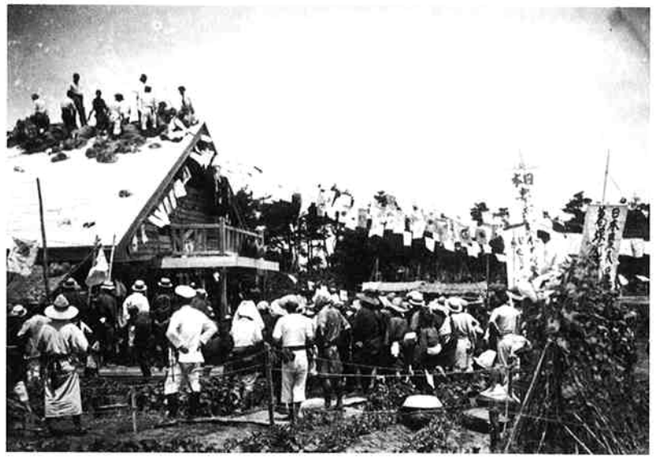
昭和62年4月に市長に初当選し、5期18年間。福島潟自然生態園整備、福島潟放水路の完成、分権型・田園型政令市の実現に功績を残す

先人はまた、志の高い人たち

市民劇「潟端の月」にあったような、自己犠牲の精神とリーダーシップをもつ庄屋と呼ばれる志の高い人たちがいました。原藤兵衛をはじめとする岡方の庄屋たちが、水原の悪代官と命をかけて闘い、罷免（ひめん）させたこと。越後戊辰戦争の際、北辰隊を組織した遠藤七郎や正気隊を組織した曽我長左衛門たちは、水害と年貢のことを心配し、農民の地位向上を期待して、草莽（そうもう）の勤王隊（きんのうたい）として明治維新に参加したというすぐれた歴史があります。また、大正時代の末には有名な木崎村小作争議が起きました。私はそこに芽生えた村政民主化と自治意識の高さこそ、後世に残されるべき評価であると思っています。

遠藤　七郎

葛塚の庄屋遠藤家に生まれる。越後戊辰戦争では、村内の有志と北辰隊を組織、その隊長として会津攻撃に参加。さらに佐渡、東京の警備を勤めた。



木崎村小作争議で無産農民学校を建てる（上棟式）

豊栄町、そして豊栄市になってからの近々の歴史の中にもあります。度重なる水害を克服するための福島潟放水路建設、福島潟干拓地闘争、それに続く減反豊栄方式の提起。阿賀野川水俣病闘争などのやむにやまれぬ人としての権利主張のために闘わざるを得なかった歴史もあります。

豊栄人は、自助、共助、そして公助を考える

今回の合併でも、我が身を捨てて、田園型そして分権型の政令指定都市の方向付けを確固たるものとしたのも、豊栄のリーダーたちであり、勇気ある市民の皆さんであったのです。

捨てたものではありません。豊栄には地域協議会、地域コミュニティを起こし、自助、共助、そして公助を考えようとする人たちが満ちているのです。

私たちは誇りうる豊栄人です。堂々として、未来を切り拓く大合併を成功させましょう。子どもたちに、先人に恥じない人たちがいたことを、誇りをもって語り継いでいきましょう。